

◆◆ 書 ◆◆

文字（もじ）と道具（どうぐ）について

～小学校低学年用（しょうがっこうていがくねんよう）～

●「書（しょ）」ってなに？

みなさんがいつもおてがみをかくときにつかうもじは、ことばをつらえるほうほうとしてつくられました。『書』（しょ）はふで（いたちやひつじなどの毛でつくったもの）とすみとよばれるくろいえきをつかってしろいかみのうえにこのもじをうつくしく、きもちをこめてかくげいじゅつです。いまの『書』は大きく漢字（かんじ）、仮名（かな）、篆刻（てんこく）と3つに分けられます。それではこの3つについてかんたんにおはなししましょう。

◇漢 字（かんじ）◇

かんじはむかしちゅうごくから日本へつたわってきたもじです。
かんじはえもじ(とりやさかななどのかたちをもとにしてできたもじ)からうまれました。



かんじは同じ字のかきかたのしゅるいとして篆書（てんしょ）・隸書（れいしょ）・草書（そうしょ）・行書（ぎょうしょ）・楷書（かいしょ）と5つにわけられます。

【漢字（かんじ）の作品】新井光風先生

◇仮 名（かな）◇

かなは、ちゅうごくからきた漢字をもとにしてみなさんのすんでいる日本でつくりあげられた日本人どくじのせかいにほこるげいじゅつです。がっこうでさいしょにならう『仮名』（かな）には、平仮名（ひらがな）・片仮名（かたかな）の2つがあります。ひらがながげんざいの形になったのは、ふるくへいあんじだいにさかのほりますが、かたかながいまの形にとういつされたのは、いまにちかいじだいに入ってからのようです。



【仮名（かな）の作品】日比野光鳳先生

むかしのひとは中国からつたわった漢字をつかって日本語をあらわすほうほうをかんがえました。それでできたものが表音文字（ひょうおんもじ）で、漢字の音だけをりようして書かれたものです。今でいうあてじみみたいなもの考えてください。それからそのかんじをかんたんにしようと形をかえたのがいまの平かなです。

◇篆 刻（てんこく）◇

『篆刻』（てんこく）とは、「石、木、銅（どう）などの印材に篆書（てんしよ）をつかってもじをほる」ことです。

今からおよそ 5500 ねんまえにうまれた西メソポタミヤの印章が（いんしょう）が、はるばる中国につたえられてきたのがはじまりのようです。印は今も昔も自分の信用をしめし、けんりとぎむをあらわすものに使われています。



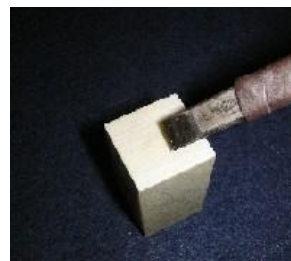
【篆刻（てんこく）の作品】

小林斗盒先生

『篆刻』は紙のかわりに小さなしかくの石や木をつかい、鉄筆（てっぴつ）とよばれる先のとがった刀でもじを書くようにうつくしくほる芸術です。今日では、篆書のみではなく、隸書・楷書・行書・草書・かななどいろいろなしゅるいの文字をつかって『篆刻』とよばれています。



●篆刻の道具いろいろ



●ほる

◇書のどうぐ、つかいかた◇

●筆（ふで）

書では、字を筆をつかってかきます。いろいろな字を書くために、筆のしゅるいもいろいろあります。



筆はどうぶつの毛でつくられています。

毛のしゅるいは、たぬき、いたち、うま、しか、ひつじ、ねこがつかわれています。

毛のながさ、やわらかさ、大きさもさまざまです。ながいもの、みじかいもの、かたいものやわらかいもの…

どんな筆でかいているのかをかんがえながら見るのもおもしろいかもしれませんね。

●紙（かみ）

書で筆と同じようにたいせつなのは紙です。紙にもさまざまなしゅるいの紙があります。紙はしぜんのくさや木をつかってつくられています。

●墨（すみ）

墨は文字をかくくろいえきたいです。

墨を筆につけてかいていきます。



●道具（どうぐ）

かくためには、硯（すずり）など、このほかにもいろいろな道具があります。